

ならずのかね

〔低学年〕

これは せとないかいの 牛島うしじまという ところの お話はなです。

この しまには むかしから 「ならずのかね」といって、人びとから おそれられている かねが ありました。このかねをつくと、たちまち 大金おおかねもちに なれるが、しんだら おそろしい じごくに おちると いう いいつたえが あるのです。だから、しまの 人ひとたちは、だれも この かねを ついたことが ありませんでした。

ある 年としの お正月しょうがつの 夜よるの ことです。

ゴーン、ゴーン

と、とつぜん かねの 音おとが 島しまじゆうに ひびきわたり ました。人ひとびとは このぶきみな 音おとに ふるえあがりました。



このかねをついたのは、まるおござえもんという人でした。ござえもんは、くまもとの人でしたが、いくら はたらいても くらしが 楽にならないので この牛島に やってきて りょうしを していました。

ござえもんは、このかねの いったえを 聞いて、なんども かねの 下に 来て、つこうか つくまいか 考えていましたが、とうとう この夜 かねを ついたのです。

その あくる日から、ござえもんの 船は、たくさん 魚が とれるようになりまし
た。そして、たちまち 大金もちになり、せとないかい一の 船もちになりました。

大金もちに なってからの ござえもんは、毎日、毎日、ぜいたくを するようにな
りました。

ある 日ひの ことことです。ござえもんは、

「わしの 船ふねを ぜんぶ 海うみに ならべて ながめて みたいものじゃ。」
と いった 自分じぶんの 船ふねを 日本中にほんじゅうの 海うみから よびもどして せとないかいに ならば
せました。

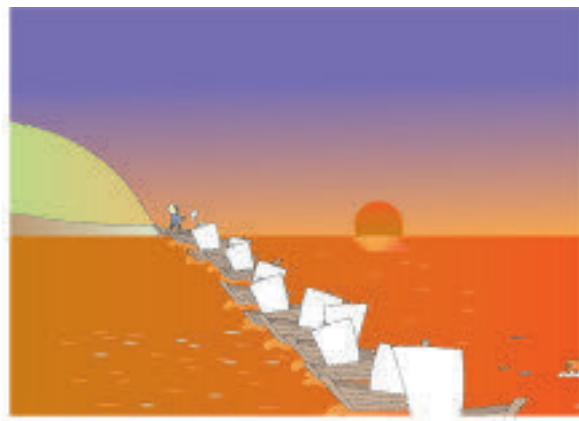
ござえもんは、山やまの 上うへから この 船ふねを 数かずえはじめました。ところが、ぜんぶ数かずえ
おわらない うちに、日ひが くれてきました。そこで、ござえもんは、

「お日ひさま、しずむのは しばらく まって ください。」

と いった、もっていた 金きんの おうぎで お日ひさまを まねき
かえしました。すると どうでしょう。西にしの方ほうへ しずむは
ずのお日ひさまがまた のぼって きたのです。おかげで ござえ
もんは 船ふねを ぜんぶ 数かずえる ことが できました。

「どうじゃ。わしは、この よで 一番いちばんの 大金おおかねもちじゃ。
お日ひさまでも わしの ねがいを きいて くれたぞ。」

と いった 言いいました。



やがて、おいわいの さかもりが はじまり、大にぎわいを していた 時のことです。
今まで 晴れて いた 空が きゆうにくもって、かみなりが なりひびき大あらしに
なりました。

海のござえものの 船は、あつという 間に 一そうも のこらず
そこに しずんで しまいました。

すべての 船を なくした ござえもんは、「ならずの
かね」の 前で いつまでも 立ちつくしていたと いう
ことです。

